

全文構造解説

この冊子の使い方

1つの文について、【英文】→【構造】→【解説】→【語句】の順で並んでいる。

1. 【英文】を音読する。構造と内容が理解できれば、次の【英文】に進んでよい。理解できなければ、
2. 【構造】を音読する。文の構造と、まとめりごとの訳（直訳）を確認する。さらに、必要に応じて、
3. 【解説】を読む。直訳を咀嚼して、要するにどういうことを言っているのか、内容の理解を試みる。
この時点で理解できなければ、「解答・解説」の日本語訳（意識）で内容を確認する。
4. 理解した内容を念頭に、構造と内容が理解できるまで、繰り返し【英文】と【構造】を音読する。
5. 【語句】を音読して、意味を確認する。

最後にもう一度、できれば二度三度、本文英文を、できるだけ速く、頭から意味をとりながら読むこと。

凡例および注意点

凡例：

① = 大問番号 ❶ = 段落番号 ❶ = 文番号

【構造】 = 【構造】

主 = 主語 動 = 動詞 目 = 目的語 補・名 = 補語となる名詞

副 = 副詞 関代 = 関係代名詞 過分 = 過去分詞 など

「 」 = 直前部分までの訳（直訳中心）

[] / { } / [[]] など = 注意を要する、句や節などの意味のまとめり

*❶ = 【解説】 とくに注意を要する箇所の指摘および解説

【暗例】 = 例文。暗唱できるようになることを強くお勧めする

() = 省略可、あるいは補足・別表現

[] = 直前の語句との入れ換え可

< > = 重要な用語、あるいは構文・イディオム

【語句】 = 【語句】

[|] = 発音。左側が発音記号。右側が発音時の目安となるカタカナ表記で、ゴシック体はアクセント

⇒ = 派生語・反意語 など

注意点：

【構造】と【解説】は、既出表現や構造が平易な英文については、簡略化、あるいは省略することがある

全文構造解説

凡例：
 主語
 目的語
 接続詞
 補・形 補語となる形容詞
 副詞 (句・節) など

英文の構造について

英文の構造は、〈**文の要素**〉と〈**副詞**〉で説明できる。文の要素とは、**主語** (S)、**述語動詞** (V)、**目的語** (O)、**補語** (C) のことで、これらを正しい順番で並べることで「文法的に正しい」文が成立し、欠けると文が成立しない。他方、副詞は文の要素ではなく、なくても文法的に正しい文が成立し、置く位置（順番）も比較的自由である。

主語とは、日本語の「～は、～が」にあたる、文の主体となる名詞のこと。述語動詞とは、日本語の「～する、～である」にあたる、主語（に相当する名詞）の動作や存在を表す動詞のこと。目的語とは、日本語の「～を、～に」にあたる、主語の動作の対象（目的）となる、主語とは異なる名詞のこと。補語とは、主語や目的語の内容を補う、名詞あるいは形容詞のこと。内容的に〈主語＝補語〉あるいは〈目的語＝補語〉が成立する。

文の要素と副詞は、文構造の「役割」としての**品詞**に分類できる。つまり、主語と目的語は必ず**名詞**、述語動詞は必ず**動詞**、補語は**名詞**あるいは**形容詞**である。これに**副詞**を加えた4つの品詞は、(単)語のほかに、複数の語からなる意味のまとまりである〈**句**〉や〈**節**〉の形をとることもある。

4つの品詞の性質についてまとめると、名詞は「人、もの、こと」を表し、動詞は名詞の存在や動作を表し、形容詞は必ず名詞を形容（修飾）し、副詞は名詞以外のあらゆるものを修飾する。

句と節についてまとめると、節とは〈主語＋動詞 (SV)〉構造を中心とする1つの意味のまとまりのことで、句とはSV構造を中心としない1つの意味のまとまりのことである。まず節は、文の中心となる内容の〈**主節**〉と、主節に従う〈**従属節**〉に大別できる。従属節はふつう**接続詞**に導かれて、**名詞節**や**副詞節**になる。次に句は、複数の語で1つの名詞の意味となる**名詞句**、同じく1つの動詞の意味となる**句動詞**（動詞句とはいわない）、同じく**形容詞句**、**副詞句**となる。

本冊子は、すべての文について、文の要素と副詞を「意味のまとまり」で切り分け、それぞれがどのような形（名詞句・節や副詞句・節など）になっているのか、その枠組みを確認できるようにしたものである。英文の構造を正しく理解するということは、この「意味のまとまり」の枠組みを正しく理解することそのものであり、例えば関係詞や分詞の後置修飾など、学習者の多くが苦手とする文法事項は、この枠組みから考えることで単純化できる。容易に理解できる文もあれば、そうではない文もあるだろうが、その根底に共通する文構造を意識し、繰り返しの訓練によって身につけてほしい。それをやがて意識下に追いやることができれば、英語力の土台は十分にできあがっているはずである。

1

1 **1** I love movies, and one of my favorite movies is the American science fiction movie *The Matrix*.

構造 **I** **動** **love** **目** **movies**, 「私は映画が大好きで」
 接 ***1** **and** **主** **one of my favorite movies** **動** **is** **補・名** ***2** **the American science fiction movie** ***3** *The Matrix*. 「そして、私のお気に入りの映画の1つはアメリカのSF映画『マトリックス』である」
***1**: この文は、I love moviesとone of my favorite movies以降の2つの節を、接続詞 and が等しく接続していると考える。このような接続詞を〈等位接続詞〉という。and や but、or などの等位接続詞が現れたら、何と何が等しく接続されているのかをそのつど正しく見極めること。なお、複数の節が等位に接続されている文を〈重文〉という。

***2**: the American以降は〈補語〉となる名詞。補語とは〈文の要素〉の1つで、〈主語〉や〈目的語〉（どちらも必ず名詞）の内容を「補う」役割を持つ、名詞か形容詞のこと。内容的に主語や目的語とイコールになる。ここでは主語 one (of my favorite movies) ＝補語 the American science fiction movie *The Matrix* となるので、この補語を〈主格補語〉という。be 動詞は主格補語をとる代表的な動詞である。

***3**: 書名、映画やミュージカルのタイトルなど、比較的大きな内容のまとまりを引用するときはイタリック体（斜体）を使い、記事や歌のタイトルなど、比較的小さな内容のまとまりを引用するときは引用符（“ ”）を使うのが基本。

語句 one of (the) ～s 「～の1つ」、favorite [féivərit ↓ フェイヴァリト] **形** 「お気に入りの」、science fiction [saiəns fikʃən ↓ サイエンス フィクション] 「空想科学、SF」、The Matrix [mætriks ↓ マトリクス] 「マトリックス（※1999年公開のアメリカ映画。主演のNeo役はKeanu Reeves「キアヌ・リーブス」。matrixの意味は「格子状回路、行列、土台）」

2 The movie is about a man, Neo, who keeps having the feeling that something is wrong with what he thinks is reality.

構造 **主** **The movie** **動** **is** **副** ***1** **[about a man** ***2**, **Neo**, 「その映画はある男性、ネオについてのものだ」 **関代** ***3** **who** **動** **keeps** **目** **{having** 「彼は持つことを続ける」 **目** **[[the feeling** **接** **that** **主** **something** **動** **is** **補・形** **wrong with** **目** ***5** **[[** **関代** **what** **主** **he** **動** **thinks** **動** **is** **補・名** **reality** **]]]]**]. 「彼が現実と考えるものがどこかおかしいという感覚を」

***1**: 〈前置詞＋名詞〉は、原則として副詞句と考えるとよい。このときの名詞を〈前置詞の目的語〉という。be 動詞に副詞が続く場合、be 動詞は「存在する」の意味でとると理解しやすい。

***2**: コンマは、説明的に情報を追加するときに使うことが多い。ここでは、a man「ある男性」という漠然とした名詞に、Neo という名前を情報として追加（挿入）説明していると考える。

***3**: 関係代名詞は、先行詞となる名詞に〈節〉で説明を加えるときに使われる記号で、先行詞を中心とした名詞節をつくる。節とは〈主語＋動詞 (SV) 構造〉を中心とする意味のまとまりのこと。この名詞節は、文を変換したものと考えるとよい。例えば、a man had a strange feeling. 「ある男性は奇妙な感覚を持った。」という文があるとして、この文を主語 a man を先行詞とする名詞節に変換すると a man who/that had a strange feeling 「奇妙な感覚を持ったある

男性」となる。また、この文を目的語 a strange feeling を先行詞とする名詞節に変換すると a strange feeling (which/that) a man had 「ある男性を持った奇妙な感覚」となる。前者は先行詞がもとの文の主語にあたるので、この関係代名詞を〈主格〉といい、後者では目的語にあたるので〈目的格〉という。目的格の関係代名詞は省略されることも多い。どちらの名詞節も、全体で名詞の意味の1つのまとまりと考える。ところで、先行詞が漠然としている場合と、先行詞がすでに絞り込まれている場合とで、関係代名詞の役割は少し変わってくる。前者においては関係代名詞以降の部分が先行詞を絞り込む（限定する）必要性が高く、これを〈限定（制限）用法〉という。後者においては先行詞がすでに絞り込まれているので限定する必要性がなく、このようなときはコンマを伴って情報を追加説明する〈継続（非制限）用法〉を使う。ここでは、先行詞 Neo が固有名詞なのですでに限定されていると考え、コンマを伴う非制限用法になる。コンマ以降は Neo に関する情報を追加説明していると考える。

***4**: 接続詞 that を文の冒頭に置くことで、その文を名詞節に変換できる。例えば Something is wrong with the world. 「世の中が何かおかしい。」という文は、that something is wrong with the world で「世の中が何かおかしいということ」という名詞節になり、I feel that something is wrong with the world. 「世の中が何かおかしいと（いうことを）私は感じている。」のように、文の要素にそのまま組み込めるようになる（※ここでは動詞 feel の目的語に組み込んだ形）。このような、接続詞 that が導く名詞節を that 節という。また、この that 節の直前に一定の名詞を置いて、その名詞と that 節とを対等に結ぶことで、例えば the fact that something is wrong with the world 「世の中が何かおかしいということ（事実）」と表現することもできる。このとき内容的に、the fact = something is wrong with the world となることから、このような that を〈同格の that〉という。同格の that の前に置かれる名詞は、fact の他に news 「ニュース」、rumor 「うわさ」、idea 「考え」、opinion 「意見」、evidence 「証拠」、ここでの feeling 「感覚」など、抽象名詞となることが多い。

***5**: 関係代名詞の what が S thinksなどを伴う、〈連鎖関係代名詞〉と呼ばれるもの。もとの文を例えば He thinks (that) something is reality. 「彼は何かが現実だと考えている。」とする。この文を、動詞 thinks の目的語となる that 節の、その節の中の主語 something を先行詞とする名詞節に変換すると、something which/that he thinks is reality 「彼が現実だと考えている何か」となる。関係代名詞 what は先行詞が不要（先行詞を含む）なので、この先行詞 something と関係代名詞 which/that は what 「こと、もの」の1語で表すことができ、よって what he thinks is reality 「彼が現実だと考えるもの」とすることができる。このとき、he thinks の部分は（ ）などでくるとわかりやすくなることが多い。なお、連鎖関係代名詞は、think/suppose/feel などの、目的語に that 節を伴う動詞で使われる。

語句 Neo [ni:ou ↓ ニーオウ] **名** 「ネオ、ニオ（※人名）」、keep *doing* 「～し続ける」、reality [ri:ələti ↓ リアリティ] **名** 「現実」

3 He eventually meets a mysterious stranger called Morpheus who offers him one of two pills.

構造 **主** **He** **副** **eventually** **動** **meets** 「彼は結果的に出会う」 **目** **[a mysterious stranger** **過分** ***1** **called** **補・名** **Morpheus** **関代** ***2** **who** **動** **offers** **目** **him** **目** **one of two pills**]. 「モルフェウスと呼ばれる、彼に2つの錠剤のうち1つを提供する謎めいた見知らぬ人に」

***1**: called は、直前の名詞 a mysterious stranger を後ろから修飾する（〈後置修飾〉という）、〈過去分詞の形容詞用法〉。名詞を修飾するから形容詞用法という。a mysterious stranger is “called” Morpheus. 「ある謎めいた見知らぬ人はモルフェウスと呼ばれる。」という受動態の文がもたになっているが、ここでは全体が名詞の意味のまとまり（名詞句）であることを意識すること。なお、この能動態は **主** **someone** **動** **calls** **目** **a mysterious stranger** **補・名** **Morpheus**. 「だれかはある謎めいた見知らぬ人をモルフェウスと呼ぶ。」（SVOCの第5文型）だから、Morpheus は目的語 a mysterious stranger を補う〈目的格補語〉である。

***2**: この関係代名詞 who はコンマを伴わないので、先行詞は直前の固有名詞 Morpheus ではなく、その前の a mysterious stranger を限定するものと解釈する。つまり、この文における動詞 meets の目的語は、その中心となる名詞句 a mysterious stranger が、過去分詞 called (Morpheus) と、関係代名詞 who 以降の2つに後置修飾されることによって成り立っていると考える。

語句 eventually [ivɛntʃuəli ↓ イヴェンチュアリ] **副** 「結局、最終的に」、mysterious [mistɪəriəs ↓ ミスティアリアス] **形** 「謎めいた」、stranger [strɛɪndʒə ↓ ストゥレインヂャ] **名** 「見知らぬ人（※「変な人」の意味はない）」、Morpheus [mɔ:rfiəs ↓ モーフィエス] **名** 「モルフェウス、モーフィエス（※ギリシア神話に登場するメルベウスは「夢を司る神」とされる）」、offer [ɔ:fə ↓ オーファ] **動** 「提供する、申し出る」、pill [pil ↓ ピウ] **名** 「丸薬、錠剤」

4 He explains that the blue pill will cause him to fall asleep and wake up in his bed with no memory of the meeting.

構造 **主** **He** **動** **explains** 「彼は説明する」 **目** **[** **接** **that** **主** **the blue pill** **動** ***1** **will cause** **目** **him** **to fall asleep and wake up** **副** **in his bed** **副** **with no memory of the meeting** **]**. 「青い錠剤は、彼が眠りに落ちて、会ったことの記憶をなくしてベッドで目覚めることをもたらさだろうということを」

***1**: 本冊子では、動詞を1つの意味のまとまりとして表す。ここでは、助動詞 will と原形不定詞 cause を合わせて1つの意味のまとまりとすること。他にも、例えば want to *do* などのよく使われる表現や、否定語 not、受動態 be *done* なども、1つの動詞の意味のまとまりとして扱う。

語句 explain [ikspleɪn ↓ イクスプレイン] **動** 「説明する」⇒ explanation [ikspləneɪʃən ↓ イクスプラネイション] **名** 「説明」、cause O to *do* 「O が～する原因となる、O が～することをもたらす（※目的語 O は to 不定詞の意味上の主語になる）」、fall asleep 「眠りに落ちる」、wake up 「目覚める」⇒ get up 「起きる、寝床から出る」、memory [méməri ↓ メモリ] **名** 「記憶」

5 However, if he takes the red pill, he will be shown reality for what it really is.

構造 ***1** **副** **However**, 「しかし」 **副** ***2** **[** **接** **if** **主** **he** **動** **takes** **目** **the red pill** **]**, 「彼が赤い錠剤を飲めば」 **主** **he** **動** **will be shown** 「彼は見せられるだろう」 **目** **[reality** **前** **for** **目** ***3** **{** **補・名** **what** **主** **it** **副** **really** **動** **is** **]**. 「本当の現実は何なのか（という現実）を」

***1**: この文は文脈的に、前文の動詞 explains の目的語である that 節と並列する内容と考えられる。

***2**: 接続詞 if は、「(もし) ～ならば」という意味の、条件や仮定を表す副詞節を導く。副詞は文の要素ではないので、なくても文法的な文は成立するし、その位置も比較的自由なのが特徴。副詞節